

『健康保険について』

エッセイスト 風間佳

私たちがケガや病気で病院にかかった時、日本では、健康保険に入っていれば、かかった医療費の何割かを払うだけですむようなシステムになっている。

かかった医療費の3割を自分が払い、あとの7割は国が払う。
また、1ヶ月の医療費が高額になり一定額を超えた場合は、あとから国が払い戻してくれる。
ありがたい話に聞こえるが、当然私たちはそのために日頃から掛金を納めている。
「参加者全員から毎月掛金を集め、必要になった人に使う」という意味では、他の保険とシステムは同様である。

この「健康保険制度」が改正のたびに条件が悪くなっている。
少し前までは、会社員は1割の自己負担で良かった。それが2割になり、3割になった。
また、高額医療費の自己負担分も、以前より増えてしまった。

条件が悪くなるたびに不安になり、文句を言いたくもなるが、でもこれは、考えれば仕方のないことなのだ。
一番の原因は、今、日本の国が抱えている最も深刻な問題「少子高齢化」だ。
子どもの数が年々減っていて、高齢者の数が年々増加しているという現象だ。
この現象がさまざまな所に影響を及ぼしている。

「健康保険制度」で言えば、
どんな人が病院にかかる率が高く医療費がかかるのかと言えば、それは高齢者だ。
病院の待合室に行ってみれば一目瞭然。内科も、外科も、眼科も、高齢者ばかり…。
年をとるほどに身体のアちこちに不具合が出てくるのは当然なこと、転んでケガもする。
今後、高齢者が増えるということは、今後、医療費の総合計が高くなるということだ。
そして、その資金源となる掛金を払う側はというと、逆に「少子化」で減っているのだ。
今でさえ、「健康保険制度」はここ数年大赤字だそうだ。

高齢化は悪いことではない、長生きするのは良いことだ。喜ばしいことだ。止めることではない。
では、少子化傾向を止められるかという点、これも多くの要因が絡んでいてすぐには止まりそうもない。
だから、今後「健康保険制度」が赤字を出さずに健全に運営していくためには、
掛金を増やすか、支給額を減らすしかない。

この現状を我々はどう受け止めれば良いのか。
まずは、個々人が健康に留意し事故に気をつけ病院の世話にならないようにすることだ。
一人ひとりが少し気をつけただけでも、医療費の総合計はかなり減るのではないだろうか。
だが、病気や事故はどんなに気をつけていても予防しきれものではない。
その時のために個人で保険に入っておくことも、これからますます大切になる気がする。

E1C-0037-iryo

